

# 立命館大學「詞學文庫」所藏の森槐南手識手校本

## 『絶妙好詞箋』について

詹 千 慧

一

森槐南（一八六三—一九一一）は、尾張（現在の愛知縣）の人、名は大來、字は公泰、通稱は泰二郎、槐南小史と號し、また別に秋波禪侶とも號した。明治期の著名な漢詩人であり、詞人でもある。槐南は家學に淵源があり、明治の初めに父の春濤に従って東京に出た。天賦の才に恵まれて幼少の頃から聰明であり、早くも十三歳にして漢詩を作ることができ、十六歳で填詞の作を發表したといふ<sup>①</sup>。森槐南は清の駐日使節と交遊があり、詩人の黃遵憲としばしば往來があった<sup>②</sup>。

槐南が作った『補春天傳奇』を見て黃遵憲は激賞し、「眞東京才子也」<sup>③</sup>と述べ、また「後有觀風之使、采東瀛詞者、必應爲君首屈一指也」<sup>④</sup>と記して槐南の才を稱賛している。槐南はかつて東京専門學校と東京帝國大學の講師となり、漢文についての講義を擔當した。その著作には『槐南集』、『杜詩講義』、『李詩講義』、『唐宋詩學』、『唐詩選評釋』、『古詩平仄論』、『詞曲概論』、『漢唐小説史』等がある。『槐南集』はす

べて二十八卷、末卷に詞曲が配され、すべて九十六闋の詞が収録されている<sup>⑤</sup>。夏承焘はかつて「日本詞人爲蘇、辛派詞、當無出槐南右者。而其穠麗綿密之作、亦不在晏幾道、秦觀之下」<sup>⑥</sup>と述べている。森槐南は明治漢詩壇の偉大な第一人者であるだけでなく、また詞においても、明治期に「填詞の黄金時代を現出せしめた第一の功勞者」でもあった<sup>⑦</sup>。

本學所藏の「詞學文庫」は、中田勇次郎（一九〇五—一九九八）先生の舊藏書を收蔵している。中田先生は京都市立藝術大學名譽教授で、京都帝國大學入學後に鈴木虎雄（一八七八—一九六三）、青木正兒（一八八七—一九六四）らの指導を受けて、唐宋詞の研究を始められた。かつて立命館大學で非常勤講師を擔當されていたことがあり、その縁で御所藏の詞籍や關連の書籍を晩年に本學に寄贈されたのである。一九九六年に、芳村弘道、萩原正樹、嘉瀬達男氏によってこれらの藏書が整理されて『詞學文庫分類目錄』が編纂され、その後「詞學文庫分類目錄補遺・正誤表」及び「詞學文庫分類目錄續補遺」等の目錄も

發表された。<sup>(8)</sup>『詞學文庫分類目錄』の著録に據れば、その藏書の中に「森槐南手識手校本」の『絕妙好詞箋』七卷『續鈔』二卷がある。<sup>(9)</sup>『絕妙好詞』七卷は、宋の周密（一二三二—一二九八）が編集したものであり、清の查爲仁と厲鶚が箋注を加え、余集、徐楨がそれぞれ一卷を續補している。『絕妙好詞』の現在見ることのできる版本には、毛氏汲古閣抄本と雍正三年（一七二五）項氏怡園刊本（項綱群玉書堂刻本）等があり、また箋注、續編を一帙にまとめて刊行した版本には、乾隆十五年（一七五〇）の查氏澹宜書屋刻本、道光年間の錢塘徐氏刊本（杭州愛日軒徐氏刊本）、同治十一年（一八七二）の會稽章氏刊本（章壽康刻本）及び宣統元年（一九〇九）の上海沅記書莊石印本等がある。<sup>(10)</sup>本學の「詞學文庫」には、吉川幸次郎博士舊藏本の康熙二十四年（一六八五）柯崇樸小幔亭刊本『絕妙好詞』七卷があり、また『絕妙好詞箋』七卷『續鈔』二卷では、道光九年の錢塘徐氏刊本、覆道光刻本、北京文學古籍刊行社の一九五六年仿宋活字刊本、及び『四部備要』本（據會稽章氏刊本選印）が収められている。<sup>(11)</sup>槐南の手識手校本は、道光九年の杭州愛日軒徐氏刊本である。

明治十年から二十五年（一八七七一—一八九二）までの間は、日本填詞史上の黄金時代（神田喜一郎博士の言葉）と言われる。この時期には名家が輩出したが、森槐南、高野竹隱（一八六二—一九二一）、森川竹磔（一八六九—一九一八）の三人が最も傑出して、明治の三大詞家と言わべきであり、その中でも槐南は「日本傑出詞家之冠」であると張珍懷は述べている。<sup>(12)</sup>槐南は填詞の作品以外にも、詞に關する評論を残しており、それは「新新文詩」に連載された槐南の「詩話」

（茉莉園雜著）に見えている。<sup>(13)</sup>神田喜一郎博士はかつて「新新文詩」の第十三集と第十九集に見える槐南の評論を整理して、『日本における中國文學Ⅰ』の中で「森槐南の詞話（一）（二）」という章を立て、槐南の詞學を紹介された。<sup>(14)</sup>槐南の詞論は、また『作詩法講話』第四章の「詩、詞之別」と第五章の「詞、曲及雜劇、傳奇」に見え、さらに雜誌「詩苑」に連載された「詞曲概論」にも示されている。<sup>(15)</sup>その他、槐南の作品に「醉江月」二闕があり、一首には「題髻蘇大江東去詞後（我思坡老）」、一首には「書柳七曉風殘月詞後（耆卿絕調）」という序がある。また「百字令・與人論詞仍用前韻（填詞一道）」等の詞作があり、これらの作品の中で彼は、自身の詞についての考え方や詞の美に對する評價等を表明している。さらに片言隻句ではあるが、槐南の評語や校語などからも彼の詞學觀を伺うことができる。本稿では「詞學文庫」所藏の槐南舊藏『絕妙好詞箋』七卷『續鈔』二卷を取り上げ、槐南の詞に對する校勘と詞論の特徴及びその價值について分析していきたい。

## 二

『詞學文庫分類目錄』は、槐南舊藏の『絕妙好詞箋』について次のように著録している、<sup>(16)</sup>

絕妙好詞箋（森槐南手識手校本）七卷絕妙好詞續鈔二卷  
宋周密編 清查爲仁・厲鶚箋（續上卷）清余集編  
（續下卷）清徐楨編

槐南舊藏の『絕妙好詞箋』七卷『絕妙好詞續鈔』二卷は、すべて一函六冊である（圖1）。第一冊は『絕妙好詞箋』卷一、第二冊は卷二、第三冊は卷三、第四冊は卷四・卷五、第五冊は卷六・卷七、第六冊は余集『續鈔』一卷と徐楸『續鈔』一卷である。版式は毎半頁九行、行二十一字、小字雙行、單欄、單魚尾、小黒口。書物全體を通して森槐南、徳山樗堂の朱筆圈點と校語、識語がある（圖2）。毎冊封面右下に「槐南／詩料」の朱文方印がある（圖3）。封面には「道光戊子夏開雕 絕妙好詞箋 續鈔附」とある。「開雕」の文字の下に「每部紋銀／壹兩貳錢」という朱色の楷體印記があり、「續鈔附」字の左下に「絶

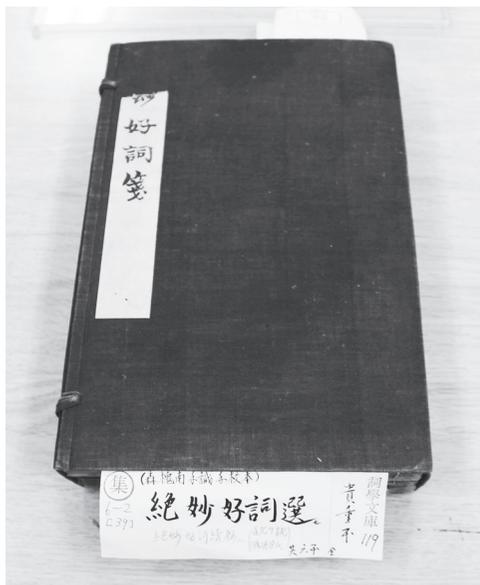


圖1

妙／好詞」朱文方印、「秋聲／館主」白文方印がある。封面の左頁に朱文圓章があり、また第六冊卷末の匡郭外左下にもこの印章があるが、印色が極めて薄く、字形を識別しがたい。江戸後期、日本國內は不穩な状況であり、幕府は特に外國からの輸入品に目を光らせていた。この印章は書籍が輸入検査に合格したことを示す證であろう（圖4）。

卷頭には「絶妙好詞箋提要」、即ち「四庫全書總目提要」が置かれている。天頭に「讀我書／屋暴／書之章」という朱文方印があるが、誰の藏書印であるかは不明である。匡郭外右下方に「森／宝書」白文方印があり、この本が森槐南の所藏であったことを示している（圖5）。提要後に「絶妙好詞紀事」、次に柯煜、高士奇撰の「原序」、張炎、錢遵王、厲鶚の「題跋附録」、厲鶚の「絶妙好詞箋序」及び「絶妙好詞箋目錄」がある。末尾に「道光八年夏錢唐徐楸問蘧鳩工重録／章純齋、陸貞一書」と「杭州愛日軒刻」等の墨筆がある。

本書卷一の首行に「絶妙好詞箋卷一」とあり、下方には「心華／室」朱文方印がある。また次行には「弁陽老人周密原輯 宛平查爲仁、錢唐厲鶚 同箋」とある。「心華室」は、中田勇次郎先生の室號であり、中田先生が詞籍を本學に寄贈される際、本學が刻印して鈴したものである（圖6）。卷二から卷六に至るまで、天頭には「讀我書／屋暴／書之章」朱文方印があり、匡郭外の右下に「森／宝書」白文方印がある。『續鈔』の末尾には查爲仁の息子である善長、善和の撰になる「絶妙好詞箋跋」があり、文末に「錢唐徐楸重校勘」とある。『續鈔』の巻首には卷二から卷六に至るまでと同じく、「讀我書／屋暴／書之章」、「森／宝書」等の印記がある。首には「余氏原序」、次に「絶妙

暗香

石湖詞梅

舊時月色。算幾番照我，梅邊吹笛。喚起玉人，不管清寒與攀摘。何遜而今漸老，都忘卻、春風詞筆。但怪得竹外疏花，冷入瑤席。江國正寂寂。歎寄與路遙，夜雪初積。翠樽易竭。紅萼無言，耿相憶。長記曾攜手處，千樹壓西湖寒碧。又片片、吹盡也，幾時見得。

硯北雜志：小紅范成大青衣也。有色藝成大請老。姜夔語之一日授簡徵新聲。夔製暗香詞。影兩曲。成大使二妓習之。首節清婉。成大尋以小紅贈之。其夕大雪。過垂虹。賦詩曰：自臺新詞韻最嬌。小紅低唱我吹簫。曲終過盡松陵路。回首烟波十四橋。

疎影 仲呂宮

苔枝綴玉。有翠禽小。枝上同宿。客裏相逢，籬角黃昏無言自倚修竹。昭君不慣胡沙遠，但暗憶江南江北。想佩環月下歸來，化作此花幽獨。猶記深宮舊事，那人正睡裏，飛近蛾綠。莫似春風，不管盈盈，蚤與安排金屋。還教一片隨波去，又却怨玉龍哀曲。等恁時、重覓幽香，已入小窗橫幅。

白石道人歌曲題云：辛亥之冬，予載雪詣石湖止。既月授簡索句，且徵新聲，作此兩曲。石湖把玩不已，使妓肄習之音節，譜宛乃命之曰：暗香疎影。張叔夏云：白石暗香疎影二曲前無古人，後無來。

琵琶仙 吳興春遊

雙漿來時，有人似舊曲。桃根桃葉，歌扇輕約飛花。蛾眉正奇絕。春漸遠汀洲自綠。更添了幾番啼鴉。十里揚州三生杜牧。前事休說。又還是官燭分煙，奈愁裏、恩恩換時節。卻把一襟芳思，與空階榆莢，千萬縷藏鴉細柳。為玉樽起舞，回雪想見西出陽關，故人初別。

白石道人歌曲題云：吳都賦：戶藏煙浦，家具畫舫。惟吳興為然。春遊之盛，西湖未能過也。已酉歲子與蕭時甫載酒南觀，因遇成歌。張叔夏云：情景交銜，得言外意。又云：白石疎影暗香揚州慢一夢紅琵琶仙淡黃柳等曲，不惟清虛且又騷雅讀之使人神觀飛越。

法曲獻仙音 張彥功官舍

虛閣籠寒，小簾通月。暮色偏憐高處。樹隔離宮，水平馳道。湖山盡入樽俎。奈楚客淹留久。砧聲帶愁去。屢回顧。過秋風未成歸計。誰念我，重見冷楓紅舞。喚起淡妝人，問逋仙今在何許。象筆鸞牋，甚如今、不道秀句。怕平生幽恨，化作沙邊煙雨。

白石道人歌曲題云：張彥功官舍在鐵冶嶺上，即昔之教坊使宅。高齋下瞰湖山，光景奇絕。子數過之為賦此。

念奴嬌 吳興荷花

絕少子司卷之二

圖 2

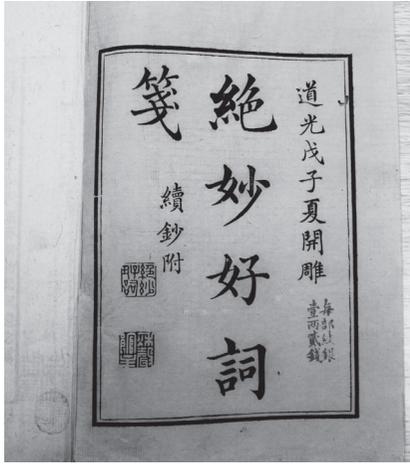


圖 4



圖 3

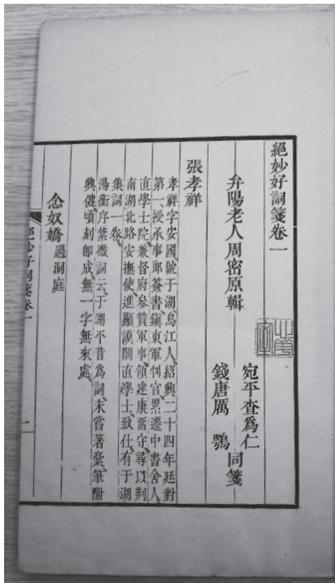


圖 6

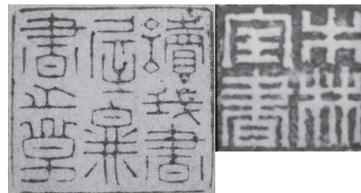
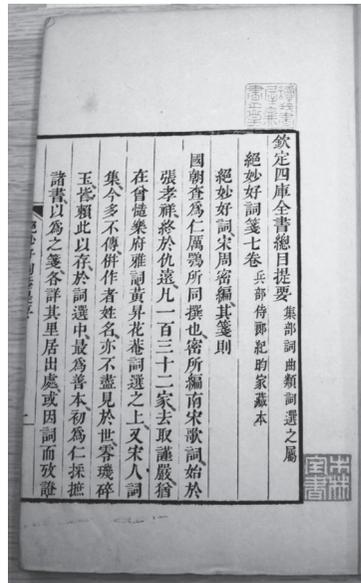


圖 5

好詞續鈔目錄」、末行に「錢唐姚 煌星甫注」とある。その後に「絕妙好詞續鈔」、首行に「弁陽老人周密原本 仁和余 集鈔撮」とあり、「原本」の右下に「心華／室」朱文方印があり、末に「絕妙好詞續鈔跋」とある。その後は「絕妙好詞續鈔」、首行に「弁陽老人周密原本 錢唐徐 楸補錄」とあり、次に「絕妙好詞續鈔」、末に「仁和王金鎔 孫元濬同校勘」及び「武林任九思刻」等の文字がある。卷末に、下記のような槐南による朱筆の題識がある（圖7）。

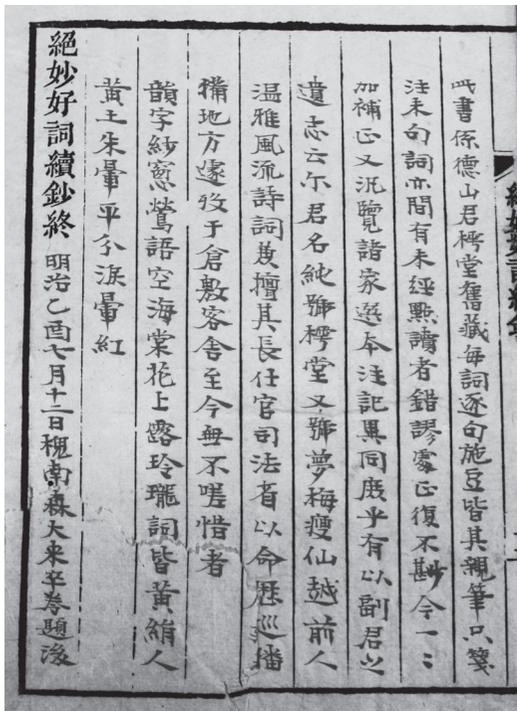


圖7

此書係德山君樗堂舊藏、每詞逐句施豆、皆其親筆。只箋注未句、詞亦間有未經點讀者、錯謬處正復不尠。今一一加補正、又汎覽諸

家選本、注記異同、庶乎有以副君之遺志云爾。君名純（一）、號樗堂、又號夢梅瘦仙。越前人、溫雅風流、詩詞兼擅。其長仕官司法省、以命歷巡播備地方、遽歿于倉敷客舍、至今無不嗟惜者。韻字紗窻鶯語空、海棠花上露玲瓏。詞皆黃絹人黃土、朱暈平分淚暈紅。  
明治乙酉七月十二日、槐南森大來卒卷題後。

此の書は徳山君樗堂の舊藏に係り、毎詞句を逐うて豆を施すは、皆其の親筆なり。只だ箋注は未だ句せず、詞も亦た間ま未だ點讀を経ざる者有り、錯謬の處も正に復た尠なからず。今一一補正を加え、又た汎く諸家の選本、注記の異同を覽て、以て君の遺志に副うこと有るに庶からんと爾云う。君名は純（一）、樗堂と號し、又た夢梅瘦仙と號す。越前の人、溫雅風流にして、詩詞兼ねて擅にす。其れ長く司法省に仕官し、命を以て播備地方を歴巡するに、遽かに倉敷の客舍に歿し、今に至るも嗟惜せざる者無し。

韻字紗窻鶯語空しく、海棠の花上露玲瓏たり。詞は皆黃絹なるも人は黃土、朱暈平分して淚暈紅なり。  
明治乙酉七月十二日、槐南森大來卷を卒えて後に題す。

この題識から、この詞集がもと徳山樗堂の舊藏書であり、その後槐南が圈點を附して校讀し、誤謬の箇所を補正し、諸本の異同を注記したものであることが分かる。この識語のほか、槐南は卷一から卷七の末までのすべてに校閱完了の識語を記している。

乙酉七月初六閱完 公泰氏  
 乙酉七月初七閱完 公泰氏  
 七月初八閱完 槐南詞客  
 七月初九閱完 槐南生  
 七月十日閱完 公泰氏  
 七月十日夜燈下閱完 槐南  
 七月十一日閱完 大來

乙酉は明治十八年（一八八五）であり、森槐南の「詩話」（茉莉園雜著）が「新新文詩」に連載を開始した年でもあった。識語にいう徳山樗堂は、名は純一、字は公秉、別號は夢梅瘦仙、越前（現在の福井縣）の人である。樗堂は槐南の父・森春濤の門客であり、東京司法省に勤めて、明治九年（一八七六）六月に公用で出張した際に、急な病を得て倉敷（岡山縣）の客舎で亡くなった。神田博士は「樗堂の歿後、槐南はその手澤の存する『絶妙好詞箋』を獲て、……（『槐南集』卷六）の一詩を賦してあるが、その詩の前に附した小引によると、その書には、樗堂の自筆で、毎詞、句を逐うて豆が施してあつたといふ。おそらくこの『絶妙好詞箋』などは樗堂の作詞の模楷であつたのであらう」と述べている。『槐南集』卷六収録の詩作「書絶妙好詞後并序」を検すると、その序文と前掲の題識との間にはやや異同がある（圖8）。

『絶妙好詞箋』卷二に史達祖の「雙雙燕（過春社了）」詞があり、そ

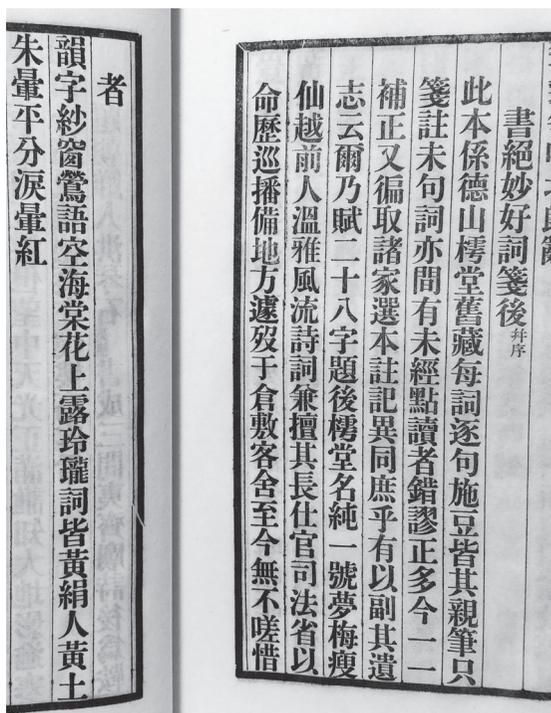


圖 8

の結句「愁損玉人、日日畫欄獨凭」の天頭に、「一本『愁損翠黛雙蛾』、是徳山君樗堂所注（大來）」という二つの校語がある。兩者の筆迹は明らかに異なっており、後者には槐南の署名があることから、二人の校讀の痕迹を見ることが出来る。また、「雙雙燕」詞結句「愁損玉人日日畫欄獨凭」の「日日」の右下に、胡粉で塗抹した迹が見える。これは樗堂が「愁損玉人日日、畫欄獨凭」と點讀していたのを、槐南が「愁損玉人、日日畫欄獨凭」と改めたのであろう。ここは槐南の點讀が正しい（圖9）。

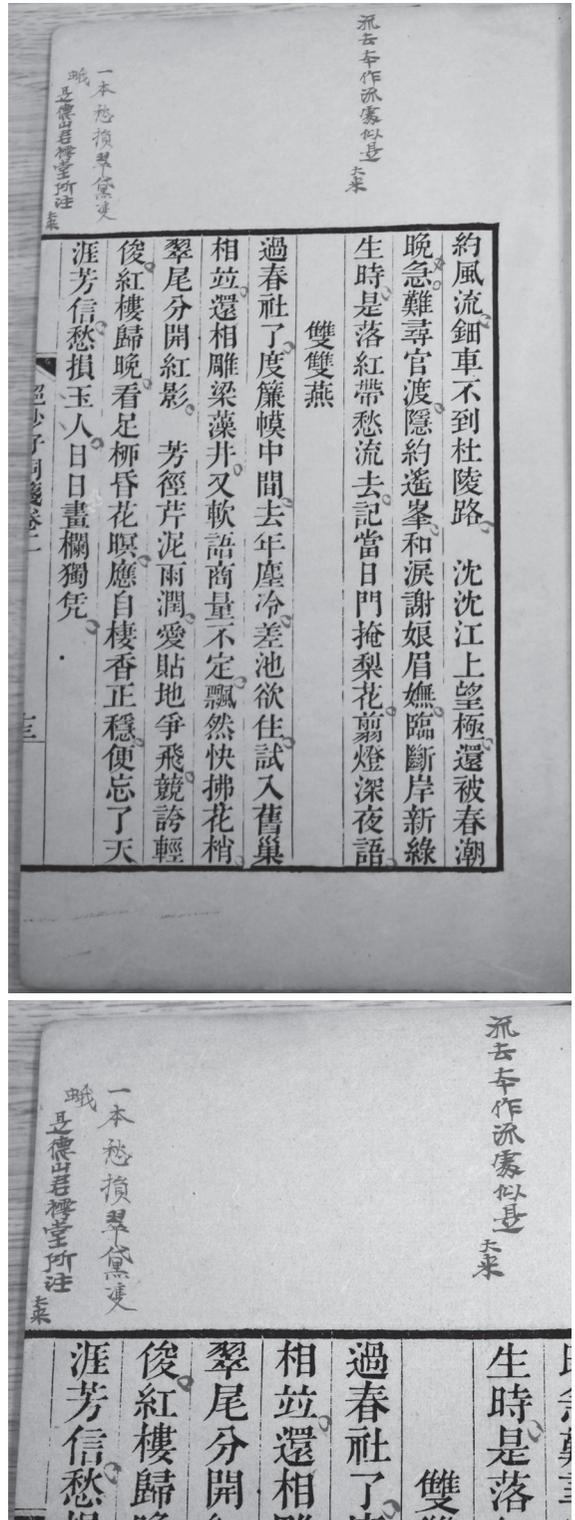


圖 9

三

槐南の校語は、清・朱彝尊の『詞綜』に基づくところが多い。また本書の槐南の手迹は、さきに引いた書末の識語を除き、大部分は天頭に書かれていて、一部は正文の側に書かれている。彼の校語と注釋には、主に次の三點の特徴があると言えるであろう。

(一)、諸本の異文の呈示と判別

卷一范成大「霜天曉角（晚晴風歇）」の末句「知人倚畫樓月」の後

の校語に、「『畫樓月』本又作『闌干雪』（大來）<sup>23</sup>」とあり、同卷の陸淞「瑞鶴仙（臉霞紅印枕）」に校して、「『睡覺』一作『睡起』。『還是』一作『猶是』、『眉山』一作『眉山』、『恨無人』又一作『恨無人』。（大來）<sup>24</sup>」とあるなどがその例である。詞の本文以外に、詞題や詞序にも異同が示される。例えば、卷一の辛棄疾「摸魚兒（更能消幾番風雨）」に、「此闕原題云、『淳熙己亥，自湖北漕移湖南，同官王正之置酒小山亭賦。』（大來）<sup>25</sup>」とあり、卷二の姜夔「淡黃柳・客合肥（空城曉角）」に、「『秋苑』當作『秋色』。（大來）<sup>26</sup>」とある。『詞綜』は「怕梨花落盡成秋色」に作っており、この詞は第十七部（清・戈載『詞林正韻』）「陌、側、識、

寂、食、宅、色、碧」を韻字としているので、「苑」字では韻が合わず、「秋色」のほうが正しい。

また、『詞綜』の誤りを訂正した部分もある。例えば、卷三の趙希邁「八聲甘州・竹西懷古（寒雲飛萬里）」の校語に、『蒿萊』、『詞綜』作『蓬萊』、尤謬。（大來<sup>26</sup>）とある。『詞綜』が誤って『蓬萊』に作っていることについては、丁紹儀（一八一五—一八八四）の『聽秋聲館詞話』卷十三にも「汪晉賢農部暨王蘭泉可寇、於詞綜書成後、先後輯補人補詞八卷、亦有未經校正處。如趙希邁八聲甘州云、『前時柳色、今度蒿萊。（蒿作蓬<sup>26</sup>）』と指摘されている。また卷七の王沂孫「高陽臺（殘萼梅酸）」に『殘萼』、『詞綜』作『淺萼』、非<sup>29</sup>』との校語がある。この詞の首句は王鵬運の『四印齋所刻詞』も「殘萼梅酸」に作り、「殘」字の下に「『詞綜』誤作『淺<sup>29</sup>』』と注している。

### (二) 本書の記述に對する説明や補注

例えば、卷一眞德秀小傳に注して「德秀字景滂（元）、更『景希』。此云『希元』、非」とあり、また同卷の劉光祖小傳に注して「謚文節」と記している。劉子寰小傳に「子寰字圻父」とあり、その校語に「一作『劉圻父、字子寰。』（大來<sup>26</sup>）」とある。また卷二の張輯「疏簾淡月（梧桐兩細）」、「山漸青（山無情）」に注して、この二首の詞は即ち「桂枝香」「長相思<sup>33</sup>」であると述べている。卷三の李肩吾「清平樂（美人嬌小）」にも校語があり、「前段二十二字、本又作『夢魂尋遍、忽向尊前見。好似烏衣春社燕、軟語東風庭院。』」とある。槐南のこの校語も、『詞綜』に基づいている。<sup>34</sup>

また他の人物の評語を補録したものもある。姜夔小傳の後に黃昇（叔暘）、沈義父（伯時）、張炎（叔夏）の語があり、これに注して「范石湖云、『白石有裁雲縫月之妙手、敲金戛玉之奇聲』。趙子固曰、『白石、詞家之申、韓也』。張叔夏又云、『白石詞不惟清虛、又且騷雅、讀之使人神觀飛越』」と記している。すなわち范成大、趙孟堅、張炎の評語を補録しているのである。

また卷三劉克莊「清平樂・頃在維揚陳師文參議家、舞姬絕妙、爲賦此詞（宮腰束素）」に次のような注がある。（圖10）

國朝祇南海『湘雲瓊語』、「唐人用周瑜顧曲事、『詠箏』云、『爲得周郎顧、時時誤拂弦』。可謂能以死爲活。至劉後邨『清平樂・詠妓』云、『貪與蕭郎眉語、不知舞錯『伊州』』。用唐人詩意、轉用更活、

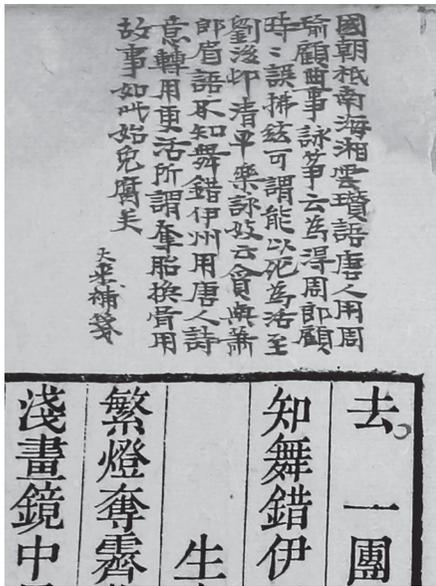


圖 10

所謂『奪胎換骨』、用故事如此、始免腐矣」(大來補箋)<sup>36)</sup>

國朝の祇南海の『湘雲瓊語』に、「唐人周瑜の顧曲の事を用い、『詠箏』に云わく、『周郎の顧を得んが爲に、時時弦を拂うを誤る』と。能く死せるを以て活くと爲すと謂うべし。劉後

邨の『清平樂・詠妓』に、『蕭郎の眉語を與えられんことを貪りて、「伊州」を舞錯するを知らず』と云うに至りては、唐人の詩意を用いて、轉用して更に活き、所謂『奪胎換骨』は、故事を用うること此くの如くにして、始めて腐を免る」(大來補箋)

槐南は、その「詩話」(茉莉園雜著)において次のように述べている(圖11)。

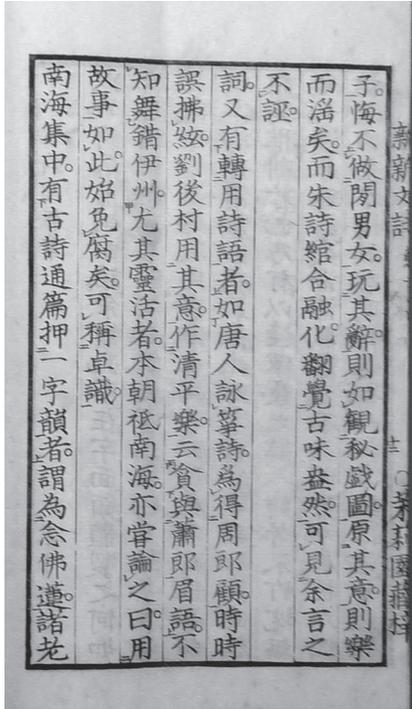


圖11

詞、又有轉用詩語者。如唐人「詠箏」詩、「爲得周郎顧、時時誤拂弦」、劉後村用其意、作「清平樂」云、「貪與蕭郎眉語、不知舞錯『伊州』」、尤其靈活者。本朝祇南海亦嘗論之曰、「用故事如此、始免腐矣」。可稱卓識。<sup>37)</sup>

詞は、又た詩語を轉用する者有り。唐人の「詠箏」詩に、「周郎の顧を得んが爲に、時時弦を拂うを誤る」と、劉後村は其の意を用い、「清平樂」を作りて、「蕭郎の眉語を與えられんことを貪りて、『伊州』を舞錯するを知らず」と云うが如きは、尤も其の靈活なる者なり。本朝の祇南海も亦た嘗て之を論じて曰く、「故事を用うること此くの如くにして、始めて腐を免る」と。卓識と稱すべし。

祇南海とは、すなわち祇園南海のことである。南海、名は瑜、字は伯玉、または正卿、別に湘雲主人とも號した。紀州の人である。詩・書・畫のいずれにも巧みで天下に名聲を馳せた。<sup>38)</sup> 槐南は『絕妙好詞箋』に祇園南海の語を引用し、また『詩話』においても南海の言葉を用いて、詞には詩語から轉用したものがあつたことを説明している。この兩者は互いに参照すべきものであろう。

### (三)、槐南の意見の提示と評論

卷二の姜夔「琵琶仙・吳興春遊(雙槩來時)」詞後の注に張叔夏の語を引用し、「白石『疏影』『暗香』『揚州慢』『一萼紅』『琵琶仙』『淡黃柳』等曲、不惟清虛、又且騷雅、讀之使人神觀飛越」とある。槐南

はこれに注して、「此語可充總贊、故節載條首。(大來)」と述べている。さきに挙げた姜夔小傳の例からも知られるように、槐南は「不惟清虛、又且騷雅」云々という語は、白石詞の優れた点を総合的に評價する際に用いるべきであると考えていたことが分かる。故にこの語を小傳の箇所に移すべきであると述べているのである(圖12)。

また卷二の史達祖「青玉案(蕙花老盡離騷句)」詞後の注に「詞旨」「屬對」の語を引き、「斷浦沈雲、空山挂雨。畫裏移舟、詩邊就夢。做冷欺花、將煙困柳。巧翦蘭心、偷黏草甲」と記している。これについて槐南は、「斷浦」以下四句、是梅谿「齊天樂」秋興及湖上二闋中語、本選中所無、而特加標擧、豈其清空綿遠、不忍割愛歟?今就本集摘載全詞於卷末。(大來)」と注し、本卷の卷末に槐南は朱筆で「史梅溪『齊天樂・秋興』云、……又『湖上即席分賦得羽字』云、……。(大來補箋)」と詞を抄録しているのである(圖13)。これは詞を補録しているのではあるが、「清空綿遠」云々という語には、槐南のこの詞に對する考え方が表れている。また作品を補録はしていないが、説明を加えている例もある。卷四の吳文英「三姝媚・過都城舊居有感(湖山經醉憤)」詞の注に「詞旨」「屬對」「警句」の語を引いているが、槐南はこれに「警句『齊天樂』以下及『屬對』皆本選不載、待他日點檢補。(大來)」と注している。卷六末尾においても槐南は、「張玉田以『春水』詞名、而本選不經錄入、未免有遺珠之憾、因補寫附後。南浦春水、……森大來「寫」と記している(圖14)。こうした「本選不載」、「遺珠之憾」、「不忍割愛」などの語から、槐南がこれらの詞を推賞しようとする意圖があったことが窺えるのである。

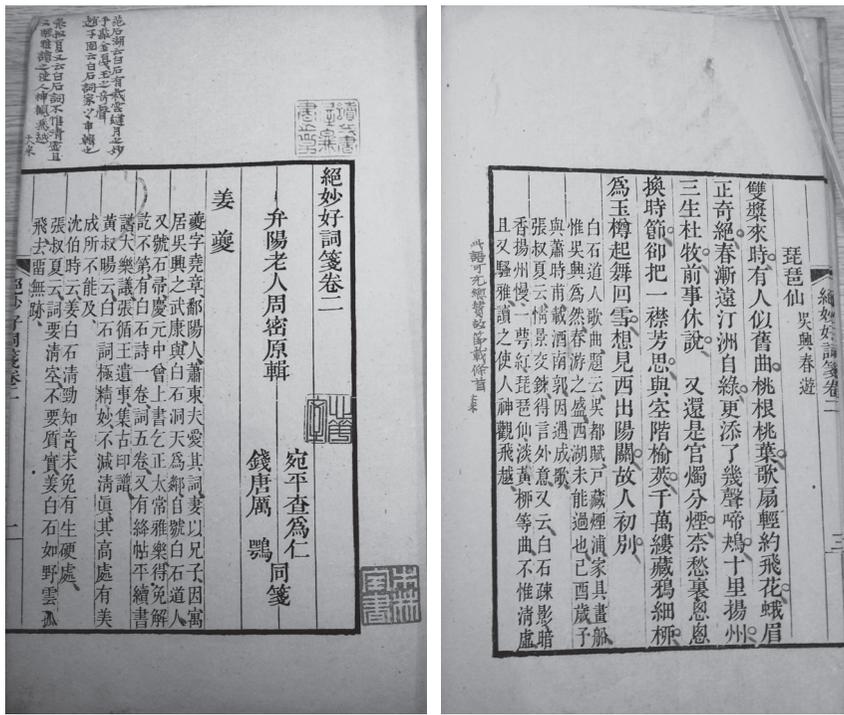


圖 12

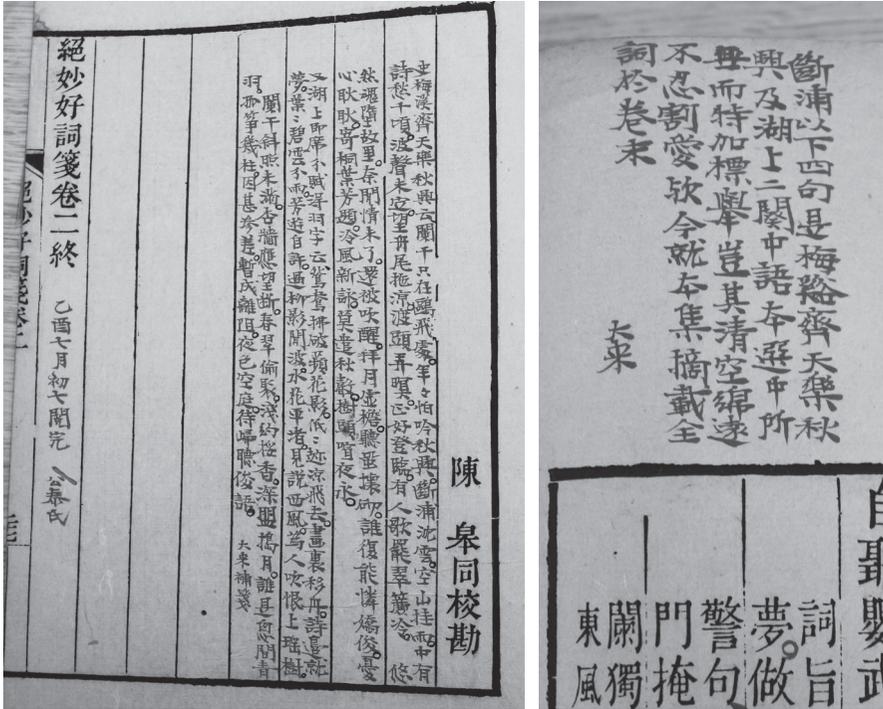


圖 13

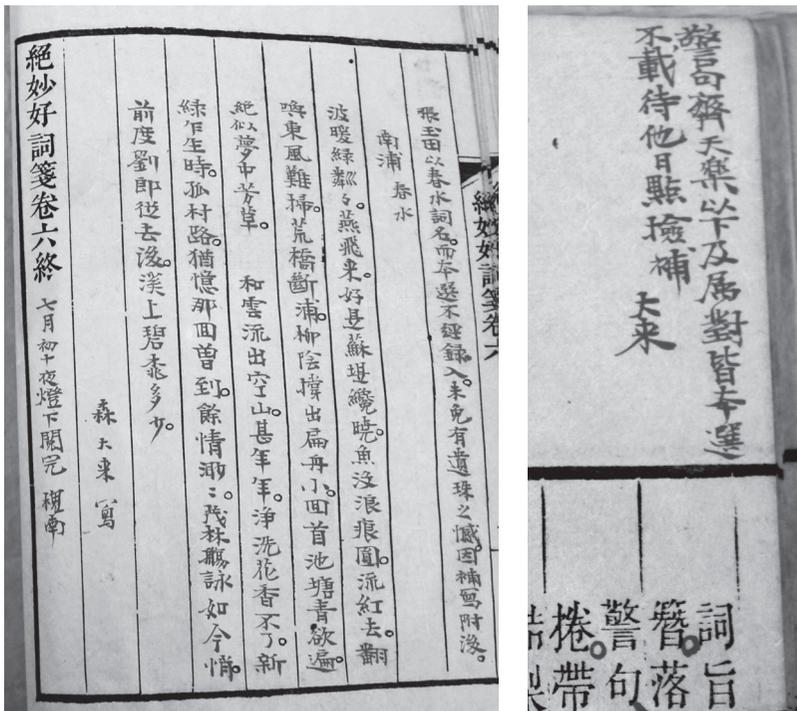


圖 14

また卷二史達祖「黃鍾喜遷鶯・元宵（月波凝滴）」に注して「朱秀水『詞綜』、『夜寒』下有『窗際』二字、蓋『喜遷鶯』每段以四字句收聲、故竹垞加二字以合調也。然此詞已云『黃鍾喜遷鶯』、明與常調不同、詎可輕易竄入？（大來）」と述べている（圖15）。この詞の末句は「怕萬一、悞玉人、夜寒簾隙」であるが、『詞綜』は詞牌名を「喜遷鶯」とし、その末句は「怕萬一、悞玉人夜寒、窗際簾隙」に作る。<sup>(46)</sup>王鵬運『四印齋所刻詞』も詞牌名を「喜遷鶯」とするが、末句は『絕妙好

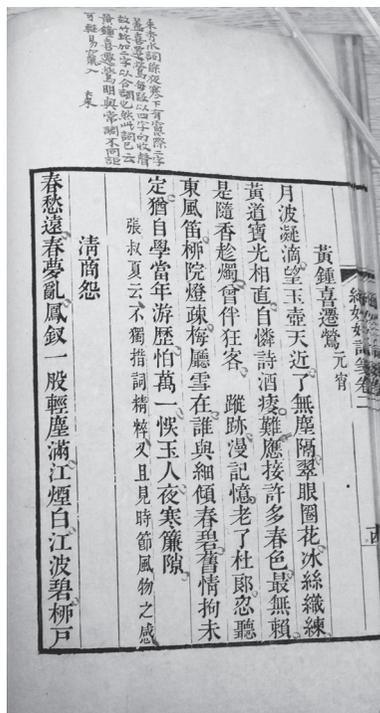
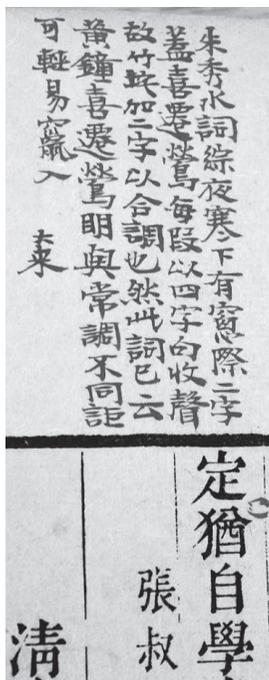


圖 15



詞箋』と同じであり、「夜寒」の下の注に、「戈選作『寒夜』。別本『寒』下有『窗際』二字」という。つまり槐南と王鵬運は、その末句について、『絕妙好詞箋』に據るべきであると認めていたのである。また卷五湯恢「八聲甘州（摘青梅薦酒）」詞後の注に「浯溪集」。眉山楊恢游浯溪、詞云、『碧崖倒影、浸一片、寒江如練。正岸岸梅花、村村修竹、喚醒春風筆硯。泝水舟輕輕如葉、只消得、溪風一箭。看水部雄文、太師健筆、月寒波卷。游倦。片雲孤鶴、江湖都遍。慨金屋藏妖、繡屏包禍、欲與三郎痛辨。回首前朝、斷魂殘照、幾度山花崖蘚。無限都附窠尊、漠漠水天遠。』按此詞甚佳、惜不著調名」とあり、天頭に「此詞與『二郎神』無異、只不合者、結二句耳。恐其別調也。（大來）（圖16）」と槐南は記している。これらはみな詞調を辨別し解明しようとする校語である。

また、作者の氏名について、『絕妙好詞』は「湯恢」に作り、詞後の注では「楊恢」に作っている。『全宋詞』は「絕妙好詞」と『花草粹編』に従って「湯恢」に作る。清人の丁紹儀（一八一五—一八八四）『聽秋聲館詞話』卷三に作者の名前と「碧崖倒影」詞の詞牌について次のように論じている。

寶山蔣劍人所著芬陀利室詞中、一題云、宋楊恢遊浯溪、作碧崖倒影一首、末句「漠漠水天遠」五字、詞甚佳、惜調名不著。各家詞選、萬氏詞律俱不載、滄海遺珠、可勝歎惋。辛亥冬、泛舟泖湖、凍雲下垂、滄波不流、絮帽篷窗、四望寥廓。爰填是解、即用其韻、援魚遊春水例、名之曰水天遠。余細繹音調、頗似二郎神、惟後結少

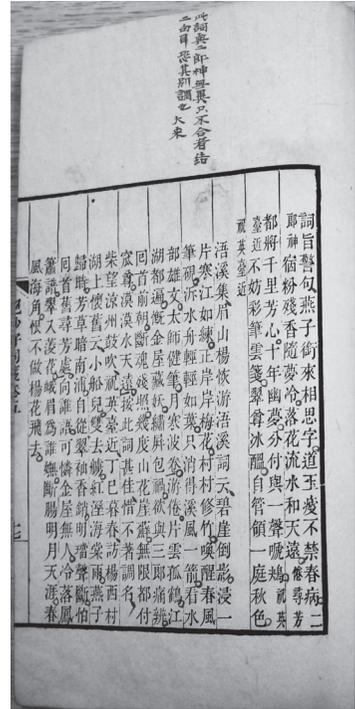
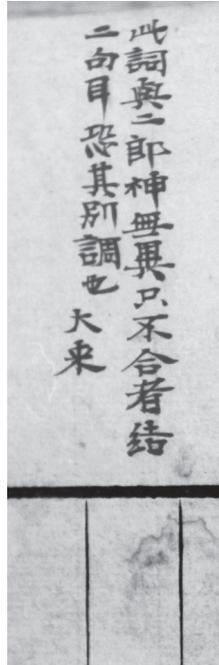


圖 16



一字。涪溪集錄其詞云、「碧涯倒影、……無限意、都附窻尊、漠漠水天遠」（無限下原脫意字。）恐係「水遙天遠」、落去一字。劍人未細考、謂爲調名不著、以水天遠名之、所作詞又於後段次句多一字、未免自誤誤人。考宋湯恢、字西村、詞綜錄詞五闕。惟新刊絕妙好詞作楊恢、箋爲眉山人。尚有八聲甘州云、……玩詞意、殆南宋遺民放浪泉石間者。楊恢之名、僅見略陽石刻敘、別議籍係賓城、非眉山。<sup>49)</sup>

寶山の蔣劍人の著す所の芬陀利室詞中に、一に題して云う、宋の楊恢涪溪に遊び、碧崖倒影一首を作るに、末句は「漠漠

水天遠」の五字、詞甚だ佳なるも、惜しむらくは調名著さず。各家の詞選、萬氏の詞律俱に載せず、滄海の遺珠、歎惋するに勝り可し。辛亥の冬、舟を涪湖に泛かぶるに、凍雲下に垂れ、滄波流れず、絮帽篷窗、四望寥廓たり。爰に是の解に填し、即ち其の韻を用いて、魚遊春水の例を援き、之に名づけて水天遠と曰うと。余細かに音調を繹ぬるに、頗る二郎神に似たるも、惟だ後結一字少し。涪溪集に其の詞を録して云う、「碧涯影を倒にし、……無限の意、都べて窻尊に附せば、漠漠として水天遠し」（無限の下に原と意字を脱す）。恐らくは「水遙天遠」に係り、一字を落去するならん。劍人未だ細考せず、謂いて調名著さず、水天遠を以て之に名づくと爲し、作る所の詞もまた後段次句に於て一字多く、未だ自ら誤りて人を誤らすを免れず。考うるに宋の湯恢、字は西村、詞綜は詞五闕を録す。惟だ新刊の絶妙好詞は楊恢に作り、箋して眉山の人と爲す。尚お八聲甘州有りて云う、……詞意を玩するに、殆ど南宋遺民の泉石の間に放浪する者ならん。楊恢の名は、僅かに略陽石刻敘に見え、別に籍を議して賓城に係り、眉山に非ざるなり。

『欽定詞譜』「二郎神」の詞牌下注に「此調有兩體、前段起句三字者、名『二郎神』、前段起句四字者、名『轉調二郎神』とあり、また『欽定詞譜』収録の徐伸「悶來彈鵲」詞の注に「此名『轉調二郎神』、與『二郎神』本詞句讀不同」とある。この詞の末句は「空佇立、盡日闌干

倚遍、書長人靜」に作り、また湯恢の「瑣窗睡起」詞も収録して、末句を「最苦是、蝴蝶盈盈弄晚、一簾風靜」としている。『絶妙好詞箋』に引く「碧涯倒影」詞の末句は「無限都附窠尊、漠漠水天遠」であり、『聽秋聲館詞話』は「無限意、都附窠尊、漠漠水天遠」に作る。また「丁氏は、この末句は或いは「漠漠水遙天遠」ではないかと考えている。この詞は別にまた『詞林韻準』（卷四十一）にも見え、文字は『絶妙好詞』と同じであり、作者名を楊恢とし、調名を「碧崖影」に作る。この「碧涯倒影」詞が、「二郎神」または「轉調二郎神」なのか、或いは別調なのかについては、後考を待ちたい。

本學「詞學文庫」所藏の槐南手校手識本『絶妙好詞箋』七卷、『絶妙好詞續鈔』二卷には以下のような價值があると考ええる。

まず、徳山樗堂は世に傳わる詞が少なく、『日本における中國文學Ⅰ』では僅かに「羅敷媚・相思（情思難繫眞珠淚）」、「極相思・驚津判事宅賞梅花、諸公皆有詩、予亦填詞（一聲長笛誰家）」、「喜遷鶯・墨水夜泛（三圍水）」、「鷓鴣天・黃石先生將還京師、填詞一闋爲驢（春思無憑譜玉琴）」の四闋のみを収録しているが、これらはすべて雑誌「新文詩」に見えるものである。<sup>①</sup> 樗堂は槐南の父である森春濤に重んじられていたが、惜しいことに残された作品が少ない。槐南の識語とその後附された詩を通じて、樗堂について、より一層の理解を深めることができるであろう。また本書が樗堂、槐南を経て、その後の中田勇次郎先生の手に入った経過についても知ることができた。

また槐南の詞論は、雑誌「新新文詩」及び『作詩法講話』、「詞曲概

論」等の書物や講義録に散見し、またその詞作から、彼の詞を學んだ經歷や詞風の趨向を考察することができる。ただこうした資料は細かく断片的であって、砂をよりわけて金を取り出す（披沙揀金）ようにしなければならぬ。これら断片的な資料と、本書に見える槐南の批校の語とを合わせて考察すれば、槐南の詞學の全體を窺うことも可能であろう。森槐南の詞學に關する研究は、現段階ではまだ多いとは言えず、今後の更なる展開を期待したい。

#### 注

- (1) 神田喜一郎『日本における中國文學Ⅰ』（『神田喜一郎全集』第六卷、同朋社出版、一九八五年四月）、頁三二二。
- (2) 蔣英豪『黃遵憲師友記』（上海書店出版社、二〇〇二年八月）、頁一五五を参照。
- (3) 黃遵憲『續懷人詩』第七首「袖中各有贈行詩」の自注に「森槐南、魯直之子、年僅十六、兼工詞、曾作補天石傳奇示余、眞東京才子也。別後時念之」とある。錢仲聯『人境廬詩草箋注』（卷七、上海古籍出版社、一九八一年六月）、頁五八二参照。
- (4) 森槐南『補春天傳奇』（清・光緒三年序刊）の「序評」、頁二bに見える。槐南『補春天傳奇』は、芳村弘道先生の御所藏本を閲覽させて頂いた。謹んで感謝申し上げる。なお、『補春天傳奇』について、夏承燾選校、張珍懷、胡樹森注釋の『域外詞選』（書目文獻出版社、一九八一年十一月）では、黃遵憲詩の自注の誤記に従って「補天石傳奇」に作っている。頁三十六參照。この件については蔣英豪氏も『補天石傳奇』是『補春天傳奇』之誤」と指摘している。『黃遵憲師友記』、頁一五五參照。「補天石傳奇」は、清・道光年間の周樂清が創作した雜劇である。鄭素惠『補天石傳奇』研究』、中國文化大學碩士論文、二〇一〇年、頁十八參照。
- (5) 森泰二郎著・森健郎編『槐南集』（文會堂書店、一九二二年三月）。
- (6) 注(4) 所引『域外詞選』（頁二）に「日本詞人爲蘇、辛派詞、當無出槐南右者。而其體麗綿密之作、亦不在晏幾道、秦觀之下」とある。
- (7) 神田喜一郎『日本における中國文學Ⅰ』、頁三二二。神田喜一郎博士は「明治の十年から二十五年に至る大體十五年間を以て、日本填詞史上の黃金時

- 代と考へてゐる」と述べておられる。
- (8) 「詞學文庫」については、汪超氏の「立命館大學兩種詞學專門文庫之價値——兼說中田勇次郎、村上哲見教授治詞的『京都學風』」(『詞學』第三十八輯、二〇一七年十二月、頁三三九—三四二)に詳しく紹介されている。
- (9) 芳村弘道・萩原正樹・嘉瀬達男編『詞學文庫分類目錄』、頁二十六。
- (10) 陶子珍『萬疊春山一寸心 古典詩詞論稿』(臺北秀威經典出版社、二〇一六年三月)、頁五十六—六十七。
- (11) 注(9)所引『詞學文庫分類目錄』、頁二十六、七十一。
- (12) 張珍懷は「他的詞格律嚴謹、聲情流美、這是竹隱、竹篔所不能及的、因此、槐南自應是日本傑出詞家之冠(彼「槐南」の詞は格律が謹嚴で、音聲も感情も流れるように美しく、これは竹隱、竹篔の及ぶことのできない所であり、これによって、槐南は日本の傑出した詞家の中で第一人者であるべきだろう)」と述べている。張珍懷箋注『日本三家詞箋注』(黃山書社、二〇〇九年七月)を参照。
- (13) 森槐南「詩話」(茉莉園雜著)は森春壽編の「新新文詩」(茉莉詩店)の第一集から十集まで、十二集から十七集まで、十九集から二十集まで掲載された。刊行時期は、明治十八年乙酉(一八八五)五月から明治二十年丁亥(一八八七)五月までである。
- (14) 神田喜一郎『日本における中國文學Ⅰ』、頁三九二—四〇二。
- (15) 森槐南『作詩法講話』(文會堂書店、一九二一年二月)、頁一七五—二九八を参照。
- (16) 「詞曲概論」は槐南の妹婿である森川竹篔が、槐南歿後に整理した講義の資料である。大正二年から四年までの間(一九一三—一九一五)、森川竹篔が主宰した雜誌「詩苑」に掲載された。森川竹篔は、名は鍵藏、字は雲卿、鬢絲禪侶と號す。高野竹隱(名は清雄、字は鐵生、號は修齋仙侶)、森槐南とともに明治の三大詞家とされる。
- (17) 森泰二郎著・森健郎編『槐南集』卷二十八、頁三a—b、頁十b—十一a。
- (18) 注(9)所引『詞學文庫分類目錄』、頁二十六。
- (19) 芳村弘道先生より御教示頂いた。謹んで感謝申し上げます。
- (20) 神田喜一郎『日本における中國文學Ⅰ』、頁三三—三。
- (21) 序文冒頭は「此本係徳山樗堂舊藏」に作る。「錯謬處」二句は「錯謬處正多、今一一補正」に作り、「汎覽」は「徧取」に作る。「副君之遺志」は「副其遺志」に作り、後に「乃賦二十八字題後」の句がある。「君名純、號樗堂、又號夢梅瘦仙」は「樗堂名純一、號夢梅瘦仙」に作る。『槐南集』卷六、頁九b—十aを参照。
- (22) 『絶妙好詞箋』卷二、頁十三aに見える。
- (23) 『絶妙好詞箋』卷一、頁五aに見える。
- (24) 『絶妙好詞箋』卷一、頁八bに見える。
- (25) 『絶妙好詞箋』卷一、頁十三aに見える。
- (26) 『絶妙好詞箋』卷三、頁十七bに見える。
- (27) 清・朱彝尊輯、汪森增訂『詞綜』、立命館大學「詞學文庫」所藏康熙三十年(一七九一)汪氏裘村樓增補三十六卷刻本 卷三十一、頁十七b。
- (28) 清・丁紹儀撰『聽秋聲館詞話』、『詞話叢編』第三册所收(中華書局、一九八六年十一月)、頁二七四三「詞綜未經校正處」の條。
- (29) 『絶妙好詞箋』卷七、頁十三bに見える。また『詞綜』卷二十一、頁六bに見える。
- (30) 宋・王沂孫撰『花外集』、頁十三b、清・王鵬運輯『四印齋所刻詞』所收(上海古籍出版社、一九八九年八月)、頁二四〇。
- (31) 『絶妙好詞箋』卷一、頁二十aに見える。
- (32) 『絶妙好詞箋』卷一、頁三十bに見える。
- (33) 『絶妙好詞箋』卷二、頁二十aに見える。
- (34) 『絶妙好詞箋』卷三、頁二十一bに見える。また『詞綜』卷二十二、頁八aに見える。
- (35) 『絶妙好詞箋』卷二、頁一aに見える。
- (36) 『絶妙好詞箋』卷三、頁二aに見える。
- (37) 森槐南「詩話」(茉莉園雜著)、「新新文詩」第三集、頁十二b。
- (38) 神田喜一郎著『日本における中國文學Ⅰ』、頁一一〇。
- (39) 『絶妙好詞箋』卷二、頁三bに見える。
- (40) 『絶妙好詞箋』卷二、頁一aに見える。
- (41) 『絶妙好詞箋』卷二、頁十五bに見える。
- (42) 『絶妙好詞箋』卷二、頁二十七aに見える。
- (43) 『絶妙好詞箋』卷四、頁六bに見える。
- (44) 『絶妙好詞箋』卷六、頁二十三aに見える。
- (45) 『絶妙好詞箋』卷二、頁十四bに見える。
- (46) 『詞綜』卷十七、頁十六b—十七aに見える。
- (47) 宋・史達祖撰『梅溪詞』、頁四a、清・王鵬運輯『四印齋所刻詞』所收、頁三七七。
- (48) 「恢字充之、號西邨、眉山人。或作楊恢、疑誤。此從汲古閣抄本絶妙好詞、花草粹編卷十一」とある。唐圭璋編纂、王仲聞參訂、孔凡禮補輯『全宋詞』第四册(中華書局、一九九九年一月)、頁三七七四參照。
- (49) 清・丁紹儀撰『聽秋聲館詞話』、『詞話叢編』第三册所收、頁二六〇七「蔣

劍人詞」條。

(50) 清・陳廷敬等纂、蔡國強考正『欽定詞譜考正』下冊・卷三十二(華東師範大學出版社、二〇一七年八月)、頁一一四三。

(51) 神田喜一郎『日本における中國文學I』、頁三三〇。

(詹斐雯 譯)

## 謝辭

拙稿を日本語に翻譯して頂いた本學大學院博士後期課程の詹斐雯氏に感謝申し上げます。また『絶妙好詞箋』書影の掲載を許可して下さい。た本學圖書館の關係各位に厚く御禮申し上げます。

(アジア・日本研究機構専門研究員)

